

# 東京バッハ合唱団 月報

[第 633 号] 2015 年 3 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101  
Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604  
Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 633

March 2015

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## モテット《イエス 喜び》 Jesu, meine Freude を歌える喜び

小海 基 (団員、荻窪教会牧師)

以前の練習の折だったか、私はバッハの数ある作品の中でもこのモテット《イエス 喜び》(BWV 227)が一番好きで、自分の葬儀にはせめて第 5 曲目の〈別れん世に〉Gute Nacht, o Wesen だけでも無伴奏で歌ってもらいたいと述べたことがあります。

私たちの東京バッハ合唱団のテナーパートで 40 年近く活躍された川戸龍夫さんが 2015 年 2 月 20 日、89 歳で突然天に召され、ご自身も開拓伝道の初めから長老として深く関り続けられた栗平教会で、23 日に行われたご葬儀には、今夏の南相馬公演に向けての練習中ということもあり、まさにこのモテットの第 1 曲と第 11 曲のコラールが印象深く歌われました。また出棺の時には、御子息の選曲により、やはりバッハのソロカンタータの名曲《われ足れり》Ich habe genug (BWV 82) が CD で流されました。この「ルカによる福音書」の初めに出てくる、幼子イエスに会ったときの老シメオンの讃歌に基づくカンタータも私は大好きで、今年の新年会(1月10日)に、大村恵美子訳でその第 1 曲目のアリアを歌ったばかりでした。こんな深い内容をもつ名曲に送られて、川戸さんの身体が聖マリアンナ医科大に献体されていくのに立ち会って、うらやましくさえ思いました。

どちらの曲もバッハらしい、彼岸志向の厭世的な内容で、「肉」よりも「霊」(魂)を求める熱烈な歌詞が用いられています。亡くなるまでダンディーでスマートであり続けた川戸龍夫さんならともかく、少々(と表現するのさえもはばかれる)太り気味の「肉」にまみれた私の葬儀の時にはふさわしくないのかもしれませんが、本当に素晴らしい詞と曲だと思います。とりわけモテット《イエス 喜び》の「肉」を避ける厳しさは、原詞であるルター訳「ローマの信徒への手紙」のせいだということも、今回よく分かりました(「新共同訳」ではこれほどずさまじく「霊肉二元論」風には訳されていません!)[第 2 曲、詞の後半参照]

とくにこのモテットは、ライブツィヒの聖トーマス教会聖歌隊、ドレスデンの聖十字架合唱団、テルツ少年合唱団、ヴィンスバッハ少年合唱団、レーゲンスブルク大聖堂聖歌隊、イギリスのいくつかの聖歌隊……等の生演奏で触れる機会があり、第 5 曲目の“Gute Nacht, o Wesen”(別れん世に)で不覚にも涙してしま

う経験があります。少年合唱団の時代からこの曲を暗譜で歌い継いでいったら、生涯、悪しき「肉」の思いに駆られることが無いのではと思うくらい、天国的な歌ですよ。

ちなみに私の持っているこのモテットの CD の中で一番好きなのは、少々古臭い「ロマン派的」な演奏でありモノクロ録音なのですが、聖トーマス教会の名楽

### 2015 年度、今後の活動予定

- ◇ 4 月より、南相馬公演に向けて本格練習開始
- ・ 荻窪：4 月 4 日(土)、目白：4 月 6 日(月)より

- プレコンサート(世田谷区内)
- ・ 7 月 12 日(日)、14:00 開演
- ・ 会場：松原教会(日本基督教団)  
(世田谷区松原 5-44-12、後日詳報)
- ・ 曲目：第 112 回定演曲目より抜粋
- ・ 演奏：石川優歌(オルガン)

- 南相馬公演：第 112 回定期演奏会
- ・ 8 月 22 日(土)、13:30 開演
- ・ 会場：南相馬市民文化会館(ゆめはっと)
- ・ 曲目・演奏者などの詳細は、公演チラシ参照

- 報告コンサート(杉並区内)
- ・ 9 月(日時未定、4 月に確定)
- ・ 会場：荻窪教会(日本基督教団)土曜練習会場
- ・ 演奏：石川優歌(オルガン)、他楽器未定

- ◇ 新規曲目の練習開始(第 113 回定演に向けて)
- ・ 9 月より、毎週土曜(荻窪)・月曜(目白)
- ・ BWV 148、40、16、192

- 第 113 回定期演奏会
- ・ 2016 年 5 月 28 日(土) 14:00 開演
- ・ 会場：府中の森芸実劇場ウィーンホール
- ・ 曲目：“日常生活のバッハ”  
カンタータ BWV 148 《み名の栄光を讃えよ》  
カンタータ BWV 40 《地に来ませり 神のみ子》  
カンタータ BWV 16 《主 ほめ歌わん》  
カンタータ BWV 192 《ああ感謝せん 神に》

長（カントール）であったギンター・ラミン指揮のもので。録音が1952年というのですから、私が生まれるよりも6年も前、もちろんこの当時にはベルリンには壁も無く（壁が設けられたのは1961～89年）、わが東京バッハ合唱団も生まれる前、「古き良き時代」の聖トーマス教会聖歌隊の録音です。LPとしては幻の名盤ですが、ARCHIVから2003年に復刻CDとして出されたものです。モノラルですし、録音も良くないのですが、当時の少年たちが張り切って歌っているのが良く伝わってきます。この歌はこのくらい自分たちの歌にして、自信とプライドを持って歌うべき作品だと教えられます。ア・カペラで演奏するラミンの指揮は、かなり自由大胆に強弱の幅やテンポを付けています。ドイツ語の歌詞が立ち上がってくるような歌い方です。歌っている人たちの信仰告白的演奏です。第3曲のサタンが吠えたけるところなどは、合唱団も悪乗りしてというのか、ほとんど地声で歌っているように聞こえます。

東京バッハ合唱団は日本語上演ですので特に感じるのが、バッハの他のどんなカンタータや受難曲、ミサにも増してこの曲の翻訳の大変さが伺えるという作品です。たった1音節 nichts（ではない！）と何度も畳み掛けている第2曲、Trotz（に抗して）と命ずる第5曲、Weg weg（去れ！）ヴェク・ヴェクとまるでアヒルの叫び声のように重ねて吠え立てる第7曲を、いったいどのように訳し得るのだろうかと思うのですが、さすがは大村恵美子訳！苦心の名訳だと思います。元のコーラルメロディーはもの悲しい旋律ですが、歌詞によってこんなにも激しくなったり、慰めに満ちたり、確信にあふれたり……と表情がすっかり変わってしまうのには本当に感銘を受けます。

東日本大震災とその後の原発事故による放射能の被害にある南相馬の人々に、このモテットの語りかける慰めがうまく届けられることを本当に祈りながら歌いたいものです。これはどんな境遇にある人にとっても、キリスト教を信じているか否かに関わらず、変わらない、奪い取ることの出来ない究極の共通の慰めを歌っているモテットだとつくづく思います。

## 川戸龍夫さん、どうぞ安らかに

荒井 せつ子（団員）

2月21日土曜日の練習場で、元団員川戸龍夫さんの突然の訃報に誰もが呆然としていました。ご家族のお話では、2月5日に心筋梗塞で入院され、15日に緊急手術を受けられたが、20日朝、穏やかに89歳の生涯を閉じ、天に召されたとのことでした。

あまりに突然なのでいまだに実感がわかず、いつものように、練習場にゆっくりとした歩調で背筋をぴん



●故・川戸龍夫さん葬儀（2015.2.23、日本基督教団栗平教会）  
写真提供：岡村 隆（団員）

と伸ばして歩いて来られ、「おー！」と言って入って来られるような気がします。

2月23日午後1時から、日本基督教団栗平教会での葬儀には、教会関係、所属しておられた他合唱団のお仲間など会堂から溢れるほどの参列者があり、東京バッハ合唱団関係では大村先生ご夫妻はじめ団員、元団員等25名余が出席しました。明るい会堂内はピンク、黄色、紫、白と春色の花が盛られ、女性牧師（高橋圭子先生）のお説教の間には、時折笑い声も出るような和やかな（葬儀にこのような表現をしてもいいのかしら）雰囲気でした。

当初、東京バッハ合唱団は葬儀式ではなく、後の会食の場で歌う予定でしたが、奥様からぜひ歌って下さいと言われ、急遽、加藤さんの指揮で式の最後に、モテット3番《イエス よろこび》の1番と11番のコーラルを歌いました。川戸さんの柩の前で、声を詰まらせながらでしたが、心を込めて歌えたことは良いお見送りになったのではないかと少し慰められた思いがしました。

其次第に記載されている略歴をお読みして、どんな時も穏やかで柔和なジェントルマンだった川戸さんは、強い確かな信仰によってその生涯を歩まれた方だったと改めて知らされました。延命治療は全て拒否され、ご遺体は献体されるとのことで、最後まですべてを捧げることを実践されました。出棺の際には、誰からともなく歌い出した讃美歌「神共にいまして」でお送りしました。

式後、場所を移してご家族が整えて下さった「偲ぶ会」では、川戸さんの愛唱讃美歌359番、男声合唱団の愛唱歌が次々と披露され歌声に満ちた和やかな会となりました。以前に「美味しい酒と寿司を用意するから、ワシの葬式には皆来いや！」と言っておられたのを思い出しました。

未熟者の私に暖かい言葉をかけてくださり、楽しいお付き合いをしてくださり、いい思い出をたくさん作ってくださって本当に有難うございました。



# バッハ・カンタータと日本の距離

大村 健二 (団員)

バッハの教会カンタータを日本で演奏したい、日本に根づかせたい、という主宰者の思いから出発したバッハ合唱団の営みが半世紀を越えた。次の半世紀へのスタートの企画が<3.11 被災地訪問演奏>である。

東京での定期公演では、後援会員やコンサートへのご常連のバッハ愛好家を中心とする千人規模の「基礎票」に支えられて、どの回もなんとか 500 席ほどは埋まるようになった。50 年の実績のたまものではあるが、その規模を突き破ることができない限界もあり、多くの課題に思いあたる。

## ■日本語演奏のバッハに初めて出会う

そして、今夏の<南相馬公演>。東京の実績の通用しない地である。実績とは、バッハの日本語演奏に耳慣れた聴衆に囲まれるということであり、キリスト教由来のバッハ・テキストの世界に親しんだ人びとに向かって歌えるということであった。ひとつ真実を吐露すれば、演奏会場のアンケートで「あれで日本語なの？」とお叱りを受けることがあるが、下手な演奏を棚に上げて言わせていただくならば、テキストの内容に親しみと理解がなければ言葉は聞きとれない。つまり、8 月の公演では、ふつうの日本の、ふつうの社会のどまん中で、初めて耳にするはずの日本語のバッハを聴いていただくというのである。ホームゲームの安易さを脱して、一語一語の〈ことば〉をはっきりとお聞かせすることに、いつも以上の努力を傾けたいものである。

が、あらかじめ結論を言ってしまうえば、何語で歌うのかという選択のレベルをはるかに超越して、最高品質の音楽をお聞かせできるよう、歌うたうたって、いつもの百倍は歌いこんで、本物のバッハをお届けする以外には道はないのである。かくして、初体験のバッハには好印象をもっていただきたい。魂にまで届いたという感想に接したいものである。ゆくゆくはバッハのカンタータ演奏がかの地に根づき、またモテットが“合唱王国” そうま地方の合唱のレパートリーに組み込まれる、そんな日を夢見ることが許されるには、言うまでもなく、上質なバッハを聴いていただく以外にない。責任は重い。

## ■そうま地方が日本のテューリンゲンになる日

ヨーハン・ゼバスティアン・バッハは、ドイツの中央部に位置するテューリンゲン地方に生まれ育ち、隣接する帝国都市ライプツィヒで後半生を終えた。昨年来、現地の方々との打ち合わせに何度か訪れたこの地域が、若いバッハの精神と楽想をはぐくみ、生涯その周辺を離れることのなかったテューリンゲンの森の山すそと、どこか通じるものを感じさせないか、東北道を降りて、山地を東に下りながら感じたことである。

バッハの教会カンタータが、今日の日本の一般社会でどのように認識されるのか、初めて聴いた方々にどんな印象をいだかせるのか、日本語の歌詞を読んだときに何を思うか。とくに、われわれの場合は日本語訳詞による

演奏でお聞かせする。

何十年もこの合唱団のなかで活動をつづけていると、しかも、先に触れたように、共感をもって来聴して下さる多くの愛好家に囲まれて歌いつづけていると、日本に数十の数に達している「バッハ合唱団」のなかで、ただ一つの特異な存在であることを忘れてしまう。しかも、われわれは日本でもっとも伝統のある「バッハ合唱団」である。それでは、半世紀も演奏を続けながら、なぜ、未だにただ一つなのだろう。日本語演奏の普及を目的として日本語版の楽譜も出版してきた。原語（ドイツ語）でバッハを歌う合唱団ならば、日本国中で 20、30 と活躍しているのに、である。つまり、バッハの宗教合唱曲を演奏し、鑑賞する環境は整っているというべきだろう。そう、バッハのカンタータはわが国に受容されている。残るは日本語演奏のことである。

## ■意味が分かることの弊害？ それとも本格的な受容

われわれは、訳詞上演を「母語で歌うこと」と定義する。聞き知るかぎりでは、英米語圏、デンマーク、スウェーデンなどの北欧諸言語圏、そしてフランスなどに、やはりバッハを自分たちのことば（母語）に訳して歌っている合唱団がかなりな数で存在する。言語の構造がドイツ語に近いから、と思う人が多いかもしれないが、それならば、その内部の人たちに聞いてみるがいい、二つの言語はまったく違う、と答えるはずである。また逆に、日本人にとってと同じように、上記の諸外国人にとっても、ドイツ語発音のシステムは決して複雑ではない。それらしく歌うことは容易だ（わが国での「第九」の原語上演がすべて上々の出来かどうかは問わない）。では、なぜ、それぞれの母語で歌うのか。答えはただ一つ、意味が分かるから。

教会カンタータが、その出自として、文字どおり「教会」での礼拝のために作られた音楽であって、牧師の説教と相たずさえて、信徒の心を堅い信仰へとみちびくことを目的としたものであることは誰でも知っている。ラテン語による典礼が、お寺の坊さんのお経と同様、チンプンカンプンであっても有り難かったときに、バッハの作曲の背景にあったのは、誰にとっても「意味が分かる」ことだった。一人ひとりの市民が「意味が分か」って生き始めたときに、歴史的な大変革が始まったのである。われわれも、そろそろ「チンプンカンプンであっても有り難い」ばかりの原語主義からは脱したいものである。

日本語訳詞上演は、歌う者にとっても聞く者にとっても、意味が分かる。すると何が起こるか。キリスト教文化への馴染みや親近感をもたない方がたにとっては、居心地の悪さを与えることになるのかも知れない。このことを、バッハ音楽が大好きで、われわれの上演 CD を何度も聴いてくださり、活動の理念をだれよりも深く理解くださっている南相馬在住の詩人、若松丈太郎氏が、このたびのプログラムの上演用訳詞をあらかじめお読みになって、激甚な天変地異を想起させるその歌詞も、救いへの希望のメッセージも、すべて受け入れられます、「主」に呼びかけることは別として――、と一般の市民の気持ちを、思慮深く代弁して下さった。



われわれは、Gott でもなく、Herr でもなく、Jesu でもなく、「主よ」と日本人のことばで、その主に向かって呼びかける。ここに、ホームランドを離れて、はじめて日本のどまん中で、バッハの心髄を聴衆にお届けする機会を得たのである。先に触れた結論へと、もういちど戻ろう、本物のバッハ音楽には言語を越える力がある。

#### ■コラールに親しみを持っていただく

昨年の秋、南相馬の現地コーラス9団体が集まって「そうま地方合唱を楽しむ会合唱団」を正式に発足させていただいた折に、本番までの1年間ときどき眺めておいていただきたい、というメッセージを添えて、見開きのバッハ・コラールの楽譜コピーを参加者全員の120名分用意してお届けした。カンタータ BWV 92 とモテット BWV 227 の、それぞれの基本コラール（後者は同時に BWV 81 の終結コラール）の楽譜と全歌詞が掲載されている。公演当日、何人かの聴き手が3曲の上演曲の旋律か歌詞かに、おや、聞き覚えがある、とニヤッと反応してくださればありがたいと思っている。なによりも、客席を埋めてくださるのはその120名の賛助演奏の方々とその仲間、ご友人のみなさまである。その日はここがホームになるはずだ。（「基本コラール2題」として当団HPにPDFが載っています。「コラール」「カンタータ」等の用語も解説しました）

### 新・刊・紹・介

森泉 朋子 [著]

## ドレスデン フ라우エン教会の奇跡

2015年1月30日、鳥影社 発行  
(電話 03-3763-3570、本体 1600円)

大村 恵美子 (主宰者)

著者は、2010年7月に『ドイツ詩を読む愉しみ』（鳥影社）を出版され、そのときも私は月報紙上でご紹介して、素直で明るい内容と文章を、多くの方々にも喜んでいただいたことがある。後援会員の母上・百合子さんと私は、合唱団以前からの旧友で、ご長女・菅原昌子さんは元ソプラノ団員で現後援会員、次女の朋子さんも50周年記念ファンドの出資会員という、合唱団サポーター一家でいらっしゃる。

今度の新刊は、私の印象からすれば、半世紀の合唱団の歩みを、深々と思い出させるような、貴重な一冊となっている。私はこれまでに、1983年の第1回から2009年の第5回ヨーロッパ巡行旅行にいたるまで、それぞれの前年の下見や、ドイツ政変の節目ごとの個人旅行もふくめて10数回ドイツを廻ったが、最初の巡行の受け入れを表示されたグンドルフ・アンメ牧師をベルリンに訪ねた、往きとかえりの電車内で識り合ったのが、ドレスデンおよびライプツィヒ在住の2人のドイツ人だった（1982年）。以後、1989年のベルリンの壁崩壊の前後の10年余、緊迫した状況の中で、両家の東西移動にまつわる危険な手助けに、私自身も携わったこともあった。長く深い友情が、今日まで続いている。

ドレスデンには、数回旅行・滞在をしたが、フラウエン教会は、いつ行っても黒々とした廃墟をさらしたままで、大戦の記録として残すよう、このまま手を入れないでおくのだと聞かされていた。この新刊の年表によると、私が初めて見たときから10年後の1992年（ドイツ統合後）になって、賛否両論のはげしい対立の中、ドレスデン市議会は教会再建を承認したとある。そして、想定外の予算超過に長引かされながらも、2005年ついに完成、10月30日に献堂式を迎えた。

たくさんの美しい写真と、著者の簡潔でしかも心の奥底にひびく記述によって、生き生きと歴史が語られ、一般に壮大、金びかの建築には、すぐ「バベルの塔」の人間の性（さが）を感じてしまう私も、キリスト教共同体のみごときにつくづく感じ入ってしまった。そして、ドイツ人たちの信仰・良心・意志・躊躇など、様々なはげしい心の葛藤が、同じ敗戦国の私たちの戦後生活にも密着していて、わがことのように納得できるのだった。

合唱団のドイツ旅行に参加された方々は、とりわけ強くひかれることと思うが、ただ単純にこの本に出会われる方にとっても、ドイツの国の挫折・復興・崩壊と東西統一、EUへの貢献——私たちが同時代人としてまざまざと共感しながら生きて来たこの半世紀を、この本でひとつに美しくまとめられて鳥瞰したような気分になれる。とても意味深い読後感で、多くの方におすすめしたいものである。

いま、敵味方に二分しなければ済まない、原始的なジャングルに突入してしまった現在、このような歴史を教えられる意味は測り知れない。（ただ全く蛇足で申しわけないのだが、私個人としては、しばしば「十字架」が希望の象徴にクローズアップされるので、そのあたりは、イスラム教、ユダヤ教の側からすると、「のどに刺さるとげ」のような違和感に突き上げられるのではないかと…。）

#### 団友・後援会員のみなさま

#### 当月報に同封して、ご招待状をお送りします

被災地の皆さんの心の奥へ、日本語のバッハをとおして、希望と信頼の祈りをお届けします。そうま地方の皆さんからは、水準の高い合唱の精神、音楽を愛する心を得て帰ってきたいと望んでいます。

日ごろの私どもの活動を見守ってくださる皆様には、遠方での開催となりますが、この友情の輪にお加わりいただけますならば望外のよろこびです。ご来聴をお待ち申し上げます。

◆会場へのアクセスは、4月号以降の「月報」でご案内する予定です。

東京バッハ合唱団

